

世界短編名作選

フランス編 Ⅰ

監修 蔵原惟人



新日本出版社

世界短編名作選

フランス編 ①

監修 蔵原 惟人
編集 稲田 三吉
小場瀬卓三
河合 亨

世界短編名作選 フランス編(1)

1977年2月25日 初版
1980年6月30日 第3刷

定価 1200円

監修	蔵	原	惟	人
編集	稲	田	三	吉
	小	場	卓	三
	河	合		亨
発行者	松	宮	龍	起

郵便番号151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3の11の8

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (478) 3311 (代表)

振替番号 東京 3-13681

印刷 享有堂印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複製複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

世界短編名作選

フランス編①

目

次

ミミ・パンソン……………ミユッセ／佐藤実枝訳	5
知られざる傑作……………バルザック／伊藤幸次訳	37
ヴァニナ・ヴァニニ……………スタンダール／栗須公正訳	67
マッテオ・ファルコーネ……………メリメ／西節夫訳	95
タマンゴ……………メリメ／原幸雄訳	111
素朴な女……………フローベール／加藤節子訳	133
ある出来事……………ヴァレス／中島公子訳	167

コルニーユ親方の秘密……………	ドーデ／佐藤実枝訳	189
最後の授業……………	ドーデ／佐藤実枝訳	197
脂肪のかたまり……………	モーパッサン／平田襄治訳	205
首飾り……………	モーパッサン／栗須公正訳	247
解説……………	河合亨	259

装
丁

伊
藤
忠
彦

ミニ・パンソン
グリゼットキー
(お針娘の横顔)

ミユッセ
佐藤実枝訳



アルフレッド・ド・ミュッセ

(一八二〇～五七)

代表作〈詩〉『夜』(一八三五～三七)、〈小説〉『世紀兒の告白』(一八三六)、〈劇〉『マリヤンヌの気まぐれ』(一八三三)、『ファンタジヨ』『戯れに恋はすまじ』(一八三四)

一

去年、医学部の講義に出ていた学生の中に、ウジェーヌ・オーベールという青年がいた。良家の息子で年は十九歳ぐらゐ、両親は田舎に住んでいて、つましい仕送りをしてくれたが、彼にはそれで十分だった。彼は落ち着いた生活を送り、ひどく気の優しい男と見られていた。どんな場合にも善良で世話好きで、骨惜しみせず、きさくな質^{たち}だったので、友だちからも好かれていた。人から非難^{たん}されたたった一つの欠点は、ひとりになって夢想に耽けるのが妙に好きだったということで、何か言うにも、ちょっとした行動をするにも極端に控え目なので、「お嬢ちゃん」という綽名がついていた。もちろん綽名にすぎないから彼自身も笑っていたし、友人たちにしても、いざとなれば彼が人に負けない勇気を示すことを知っていたから、それで彼を侮辱しているつもりなどさらさらなかった。しかし彼の品行の正しさ、ことに仲間たちの風習とはまったく相反する行動から見てこの綽名は当たっていないわけではなかった。勉強のこととなると、真先に取りかかるのは彼なのだが、これが何かして遊ぼうとか、ムーラン・ド・ブルーへ晩飯を食

いに行こうとか、ショーミエール〔当時モンパルナスにあったダンスホール。学生とお針娘で繁盛した。〕へ踊りに行こうという話になると、「お嬢ちゃん」は頭を振って自分の下宿へ帰るのだった。学生たちの間ではほとんど奇怪千万なことといえるが、ウジェーヌはその年齢や顔立ちからいって成功間違いなしというのに、いかに恋人がいないばかりか、カルチエ・ラタン〔パリの〕では昔から風習になっている、どこかのお針娘を店のカウンターで口説くというような場面を人に見られたことも一度もなかった。サント・ジュヌヴィエーヴの丘にたむろしている美女たち、学生たちにはお馴染みの女たちは彼にはぞっとするほど不愉快だった。彼女らを危険で恩知らずで墮落^{おろ}きつた人間と考え、なにがしかの快楽を与える代わりに、禍^{わざ}と不幸とをいたるところにまき散らしていくように生まれついた特別の人種と見なしていたのである。《ああいう女たちは用心しろよ、人形は人形でも真赤に焼けた鉄で出来てゐると彼は言っていた。そして不幸なことにこういう憎しみも当然と思わせるような悪い例ばかり見せられてきたのだった。外見は幸福そうにみえるこうしたかりそめの関係は、喧嘩、乱脈な生活、時には身の破滅さえ招き、そうした例は数え上げればきりがなかったし、去年も今も、そしておそらくは来年も相変わらず続くことだろう。

ウジェーヌの友人たちが、彼の道徳と小心ぶりを絶えずからかっていたことはいまでもない。

「何が言いたいのか」と仲間の一人で、愉快な奴と自任しているマルセルがよく彼にたずねた。「たまに一度くらいの誤ちや災難が何だっというんだ」

「二度とそういうことをおこさないように慎しむべきだということさ」

「そんな理屈はないね」とマルセルは応酬する、「中の一つを抜けば総くずれになる積木の家みたいな論法だぜ。一体何を心配してるんだい。われわれの仲間の一人が賭博で負けたとする、そいつは坊主にならなきゃいけないかね？ 文なしの奴もあれば、水を飲んで腹の足しにする奴もある、それだからってエリーズの食欲が落ちるだろうか？ 誰かが時計を質に置いてまで、モンモランシー〔パリ郊外の森〕で決闘する費用を作ったって、別段隣りの女がそのために不具になるわけじゃあるまい。君がロザリーのために決闘して、一太刀浴びたとする。すると彼女は君に背を向ける、それだけのことさ。そのために彼女のスタイルが少しでも悪くなるかい？ 人生にはこういった小さな不都合がばらまかれてるんだぜ。しかしそれも君が思っているほどじゃないのさ。天氣のいい日曜なんか見給え、喫茶店や散歩道や酒場

には仲のいい二人連れがわんさというから！ それにお針娘たちを一杯つめこんでふくれ返って、ラヌラ〔ブローニュ、パリで最も古いダン〕やベルヴィル〔当時のパリ郊外の行楽地〕へ行くあのでっかい乗合馬車を見てくれよ、祭日一日だけで一体どれほどの人間がサン・ジャック街〔カルチエ・ラタンにある〕から出かけていくことか！ 一大隊ほどの帽子や下着の縫子たち、それに何百というタバコ屋の売子たち、それがみんな楽しくやって、恋人を持って、まるで小雀が飛んでいくようにパリ郊外に繰り出して、田園のあずまやへと押し寄せるんだ。雨が降ればメロドラマを見に行つてオレンジを食べながら涙を流す。だってあいつら、実際よく食うからな、それに涙も氣やすく流すんだ。人のいい証拠だね。一週間の間、縫製やら仮り縫いやら縁かがりに刺繍、それに繕い物をして過ごしたあげく、日曜には憂さ晴らしと隣人愛を実践してみせるこの可哀そうな娘たちの一体どこが悪いっというんだ？ それに一方では、まる一週間、あまり愉快とはいえない代物を解剖して過ごしてきた男の方にしても、若々しい顔や、ふっくらした脚や、美しい自然を見て目の保養をするのが一番じゃないかな」

「偽善者めが！」とウジェーヌが言った。

「僕は主張するね」とマルセルは続けた、「あの娘たちは

賞めてやっていいし、またそうすべきだ。彼女たちとの交際も度が過ぎなければ悪くないとね。第一、彼女たちは美德を備えている。何しろ羞恥心や慎ましさかきにとつてはなくてはならない衣服を縫って一日中過ごすんだからね。第二に礼儀正しい。下着商^{ブラジヤ}にしても何にしても主人はみんな店の女の子たちに客への応待はきちんとやるよう躰^{もち}けているからね。第三に何をやらしても非常に丹念で清潔だ。なにしろきず物にするのとちゃんと代金をもらえなくなる衣類や生地を年中扱っているんだから。第四に真面目だ。酒といえど果実酒ぐらいのもだからね。第五にしまり屋で粗食に甘んじる。三十スー稼ぐのも容易じゃないんだから。食いしんぼうで金遣いが荒くなっているような時は、自分の金じゃないんだ。第六に、とても陽気だね、普段の仕事が死ぬほど退屈だから。それが終わるや水の中の魚のようにびちびち跳ね回るんだ。彼女たちのもう一つの取り柄は全然うるさくないってことだ。毎日の暮らしが椅子の上縛りつけになつて身動きできないから、上流社会のご婦人のように恋人を追いまわすこともできないわけだ。編み目を数えてなくちゃならないから、自然無口になる。外出しないから履物に金がかかることもないし、ついで買うようなこともめつたにないからおしゃれにも金をつかわない。

移り気だと咎められることがあるのは、悪書を読むせいで、生まれつき性悪^{しやうあく}だからでもない。店の前をあまういんなタイプの人を通るせいだよ。それに彼女たちが本当に情熱的になりうるという証拠も十分ある。セーヌ河に身を投げたり、窓から飛びおりたり、自分の家でガス自殺したりする娘たちがおおぜい、毎日のように出るんだからね。非常な節制（というより節約）をするせいで、いつも腹をへらしているか喉がかわいているという不便はあるが、しかし食事の代わりに一杯のビール、一本のタバコで満足できることも周知の事実だ。一般の家庭ではめつたにお目にかかれない美点だよ。要するに僕が言いたいの、彼女たちが善良で、愛らしくって、誠実なうえに欲がないということ、それなのに慈善病院で死んだりするのは本当に気の毒だということさ」

マルセルがこんな風に話をするのは、たいしてはキャップエで少々のぼせ気味のときだった。友だちのグラスになみなみと注ぎ、近所に住んでいるお針娘のパンソン嬢の健康を祝って飲ませようとするのだった。しかしウジェーヌは帽子を取って、マルセルが仲間たちの前で酒々^{しやうしやう}と弁じている間にそうつと逃げ出すのだった。

マドモワゼル・パンソンはいわゆるきれいな女^{ひと}というのではなかった。『きれいな女^{ひと}』と『きれいなお針娘^{ひと}』というのでは大へんな違いがある。パリの言葉でいう、いわゆる『きれいな女^{ひと}』が小さなボンネットをかぶり、平織木綿^{ヘンオリキ綿}の服を着、絹の前掛けをつけてみたら、立派に『きれいなお針娘^{ひと}』に見えるに違いない。しかし、もしお針娘^{ひと}が大仰な帽子にビロードのケープ、パルミール^{（當時のパリで一流の高級婦人服店）}仕立ての服を身につけても、必ずしも『きれいな女^{ひと}』になれるというわけでない。いやそれどころか、コート掛けと間違えられかねないだろう。実際こんなものを着ている限りそう見えても仕方がないのだ。この相違は彼女たちの生活条件の違いにあるので、とりわけ、婦人たちがまるで馬の目かくしよろしく、顔の両側に当てるものだと思っている、あの帽子^{シャペイ}と呼ばれる布張りの丸めた厚紙をかぶるか否かで両者の区別がつくのである。（もともと馬の目かくしは脇見^{わきま}を妨げるが、この厚紙は何も妨げないという違いを忘れてはなるまい）

ともあれ、小さいボンネットはしゃくれた鼻を良しと

し、その鼻が今度は大きな口を求め、そこにはきれいな歯がなくてはならず、それを収める顎縁には丸顔が必要となる。丸顔にはきらきらした眼が欲しい。眼はできるだけ黒くて、ふさわしい眉がついていれば申し分ない。髪の色は任意。黒い眼なら何色でも似合うからだ。つまり総合して見るとおわかりのようにいわゆる美人からはほど遠いのである。これがいわゆるお針娘^{ひと}の典型的なファニー・フェイスという奴で、例の厚紙の帽子の下ではみっともないかもしれないが、ボンネットをかぶれば時にはチャーミングに見え、いわゆる美人よりもいいことだってある。パンソン嬢というのもこんな嬢だった。

マルセルの頭の中ではいつのまにか、ウジェーヌがこの娘を口説いてしかるべきだということになってしまった。

これはなにゆえか？ 彼自身が、パンソン嬢の親友のゼリア嬢に惚れこんでいたからという以外、理由はわからないう。自分の好みに従ってこんな風にお膳立てをし、友だちと仲よく恋をするのが彼には自然にも便利にも思われたのだった。このような計算は珍しいことではないし、成功率も低くない。なにしろチャンスというものがあらゆる誘惑の中で一番強いのは今に始まったことではないから。隣り合わせの戸口や人目につかぬ階段や廊下、壊れた窓ガラス

がどんなに幸福なあるいは不幸な事件を生み、恋や喧嘩、喜びや絶望の原因になったことか？

しかしある種の性格の人間はこのような偶然にもてあそばれることを拒む。彼らは自分の快楽は宝くじに当たるようではなく、自分でかち取りたいと望む。そして乗合馬車の中で美人の隣りに乗り合わせたからといって、恋をする気にはなれないのだ。ウジェーヌはこういう男で、それはマルセルにもわかっていた。だから彼はずっと前からある計画を抱いていた。たわいもないものだったがすばらしい計画だと思え、取りわけウジェーヌの抵抗を絶対打ち破れるものと信じていた。

彼は夕食をおごろうと考えていたのだ。そして、そのためには自分の名の由来の聖人の祝日を口実にするのが一番だと思った。そこでビールニダースと、大きな量の冷肉にサラダを添えたもの、鉛のように厚ぼったいすてきに大きなパンケーキ、それにシャンパン一本を家へ届けさせた。まず友人の学生を二人招き、それからゼリア嬢に家で大宴会をするからパンソン嬢を連れて来るようにと知らせた。彼女たちは大喜びで承諾した。マルセルは当然ながら、カルチエ・ラタンの貴族階級の一人としてとおっていた。こういう連中の招待は誰も断わったりしないものだ。夜の七時が

打ち終わるや、二人のお針娘はこの学生の戸口を叩いた。ゼリア嬢は短い服を着てグレイの編上げ靴を履き、頭には花飾りのボンネットといういでたち。パンソン嬢はもつとつましく、着たきり雀の黒い服を着ていたが、これが彼女のたいそうお気に入り、どこかスペイン風の雰囲気、漂わせるといふ人もある。ふたりともまだこの家の主人の秘かな計画を知る由もなかった。

マルセルは前もってウジェーヌを招くようなへまはしなかった。断わられることはわかりきっていたからだ。このお嬢さんたちがテーブルについて、最初のグラスを飲み干してからやっと、彼は客の一人を迎えに行くからしばらく席をはずさせて欲しいと頼んで、ウジェーヌの住んでいる家へ出かけた。彼はいつもの通り、書物にかこまれてひとりで勉強していた。二、三、雑談をしてからマルセルは彼に向かつて、君は疲れすぎだとか、まったく気晴らしをしないのは間違いだとか、いつもの非難をやんわりと繰り返して、ちよつと散歩に出ようとかを唆した。ウジェーヌは一日中勉強して実際ちよつと疲れていたのだから承知した。ふたりの青年は一緒に外出した。そしてリュクサンブール公園の小道を少し歩き回ってから、彼を自分の家へさそひこむのはマルセルにとって造作もないことだった。

お針娘たちは二人きりで残されて待ちくたびれたのだらう、くつろぎはじめていた。肩掛けとボンネットを脱ぎ、歌を歌いながらカドリルを踊りはじめた。そしてときどきお味見と称してつまみ食いも忘れなかった。眼を輝かせ、顔は生きいきとして、陽気に息を弾ませながらダンスをやめたとき、ウジエヌがびっくりしておずおずした様子で彼女たちに挨拶した。一人で暮らす習慣のせいで彼はこの二人にはほとんど顔を知られていなかった。だから彼女たちもウジエヌを、この階層の人間の特権である大胆な好奇心で頭のでっぺんから足の先までじろじろ眺めた。それから何事もなかったかのようにまた歌い踊りはじめた。新米の客は半ばあつけにとられて、退散しようと思ったのかすでに数歩あとずさりしていた。そのときマルセルはドアの鍵を二重回しにかけ、鍵をテーブルの上にガチャンと投げ出した。

「まだ誰も来ないのかー」と彼は叫んだ、「あいつら一体何をしている？　が、まあいいや、社交嫌いのこの男が来てくれたんだ。お嬢さん方、フランス中で一番堅物の青年を紹介します。ずっと前からあなた方と近づきになりましたが、特にバンソン嬢の大へんな崇拜者なんだ」

またカドリルが止んだ。バンソン嬢は軽い会釈をしてま

たボンネットをかぶった。

「ウジエヌ！」とマルセルが叫んだ、「今日は僕のお祝いだ。この二人のご婦人はわれわれと一緒に祝いをしようにと来て下さったんだ。僕は君をむりやりひっぱってきた、それは事実だ。しかしわれわれの頼みだから、どうか気持ちよく残ってくれ給え、まだ八時頃だろう。腹がへるまで一服しようじゃないか」

こんな風に言いながら彼はバンソン嬢の方へ意味あり気な眼差しを投げた。彼女もすぐそれとわかって、ほほえみながらも一度会釈し、優しい声でウジエヌに言った。「そうですわ、お願いしますわ」

このとき、マルセルの招待した二人の学生がノックした。ウジエヌも礼儀を失しないで退散する方法はないと知って諦め、他の者と一緒に席についた。

三

夜食は長々と続いて騒々しかった。男の連中は初めからタバコの煙で部屋じゅうをいっぱいにし、渴きを癒そうとしきりに飲んだ。婦人たちはお喋りの方を受け持って、友人や知人たちを肴にかなり辛辣な悪口を言ったり、多少まゆ

つばな仕事部屋での艶話をして大いに席を賑わした。内容は本当らしくないにしても、実の^みない話ではなかった。彼女らの話によれば、司法修習生が二人でスペイン公債を動かして二万フラン儲け、それを手袋商の売り二人と六週間で費^つ果たしてしまった。パリで有数の富裕な銀行家の息子が、ある有名なお針娘にオペラ座の機敷と別荘を提供しようとし出したが、彼女は両親の面倒を見、ドゥ・マゴ^{〔當時パリで有名だった服飾品店〕}の店員に操を立てた方がいからと断わった。名前は明かせないが、その地位からして身辺がいっさ謎に包まれている、ある人物がおしのびでボン・ヌフ通りの刺繡女を訪ねたところ、お上の命令で突然その女はさらわれてしまい、銀行紙幣の一杯つまった財布と一緒に夜中の乗合馬車に乗せられ、アメリカへ送られてしまった、等々。

「もうそれくらいにしろよ」とマルセルは言った、「その話は僕らみんな知ってる。ゼリアは口から出まかせを言うし、マドモワゼル・ミミ（仲間うちではパンソン嬢はそう呼ばれていた）の情報は不正確だ。司法修習生の方は小川を飛び越えたって^{〔弁護士、公証人などの使い走りや小川をとびの遊〕}せいぜい足を挫いたくらいのことだし、銀行家が提供したのはオレンジ一つ、刺繡女はアメリカなんかいない

から、毎日正午から四時までは慈善病院で会える。なにしろ食いつめちゃってここにご逗留^{とどろふ}というわけだ」

ウジェーヌはパンソン嬢のそばに坐っていたが、何気なく言われたこの最後の言葉に、彼女が顔色を変えるのを見たと思った。と、ほとんどすぐに彼女は立ち上がって煙草に火をつけ、断固たる様子で声を上げた。

「皆さんお静かに！ 今度は私が言わせていただくわ。マルセル氏はつくり話は信じて下さらないので、私は本当の話をしましょう。エト・クオルム・パルス・マグナ・フイ」

「あなたはラテン語を話すの？」とウジェーヌが訊いた。「ごらんの通りよ」とマドモワゼル・パンソンが答える、「この文句は叔父の受け売りなの。叔父はナポレオン一世の配下の軍人でした。戦争の話をする前には必ずこの文句を唱えたものよ。もしこの言葉の意味をご存じないなら、ただで教えてあげます。《名誉にかけて誓う》という意味よ。さて、先週私は二人の友だちブランシエットとルージュットと一緒にオデオン座に行きました……」

「パンケーキを切るから待ってよ」とマルセルが言った。「どうぞ、でも話も聞いてちょうだい」と、マドモワゼル・パンソンが続ける、「つまり、ブランシエットとルージュ

エットと一緒にオデオン座へ悲劇を見に行っただです。ルージエットはご存じのようにお祖母さんを亡くしたばかりでね、四百フラン相続したの。私たちは残敷を一つ取ってありました。平士間に学生たちが三人いてね、この若い人たちが私たちに目をとめて、女ばかりだからというので夜食に招いてくれたんです」

「だしぬけにかい？」とマルセルが訊いた、「これはまた粹な話だね。で、君たちは断わったんだらうね？」

「いいえ、承知したわ」とパンソン嬢が言った。「そして芝居が終わるのを待たずに幕間にヴィオ（ヴィオという名のレスが、ともにオデオンの近くで値段はやすい。）へ繰り出したの」

「君らのナイトたちとかい？」

「ええ、ナイトたちだよ。ボーイはもちろんはじめ、もう全部品切れだと言ったわ。でもこんな失礼なやり口でしっぽを巻くような私たちじゃない。足りないものがあれば街へ探しに行けて言つてやったの。ルージエットはペンを取って結婚の披露宴のようなご馳走を注文したわ。小えび、甘味入りオムレツ、揚げ物、貽貝（ハルマシ）、雪玉子、そのほかありったけのご馳走よ。本当をいうと学生さんたちも顔をしかめたわ……」

「きまつてゐるさ！」とマルセルは言った。

「けど、私たちは気にもとめなかったの。料理が運ばれると、まるで貴婦人みたいに振舞いはじめてね、どれもこれも美味しくない、胸がむかつくつて、お皿に手をつけるや否やつかえて別のを持ってこさせたの。——ボーイさん、これを下げてちょうだい、とても我慢できないわ。こんなひどい代物をどこで仕入れたの！——学生さんたちは食べたそうだったけれど、許されなかったわ。つまりは私たちサンチョ（ドン・キホーテの従者。彼の前にご馳走が並べられたが、食べるひまなく下げられたというエピソードがある。）のような夜食をして、腹立ちまぎれに器をこわすようなことまでしたの」

「凄えなあ！ で、払いはどうした？」

「そこがまさしく三人の学生たちの頭痛の種だったの。ひそひそ声で話しているところによると、一人は六フラン持っているようだったけど、もう一人はもつとずっと少なくて、三人目は時計しか持っていなかったのを気前よくポケットから出したわ。こんな状態で気の毒な三人は支払いをいくらか延ばしてもらおうと帳場へ行つたの。そこで何と言われたと思つて？」

「そうさね」とマルセルは言った、「君たちを借金のかたにとつておいて、奴らを豚箱へ放りこんだらう？」

「違うわ」とパンソンが言う、「席につく前にルージエッ